

モンテッソーリ教育思想の誕生(4)

女性解放思想と新しい能力観

早田 由美子

幼児教育の分野で広く知られているマリア・モンテッソーリも、女性解放思想について唱えていたことはあまり知られていない。十九世紀後半から二十世紀

の関連でモンテッソーリの教育思想の形成について見ていきたい。

国際女性会議でのモンテッソーリ

前半は、今日の生活にも深く関わるような多様な学問や思想が花開いた時期であり、女性解放思想もこの時期に発展した。これまで、特に、医学、生理学、人類学からの影響を見てきたが、今回は、女性解放思想と

女性の高等教育への進学にさまざまな壁がまだ存在していたこの時期、モンテッソーリは医学部に入学するために女性であるがゆえの様々な困難を経験した。

しかし、同じ様に困難の末、学士となった他の女性たちとは異なり、彼女は卒業すると様々な国際会議で演説をする機会に恵まれるなど、世間の注目をあびて活躍することになる。演説のテーマは児童労働の問題や障害児教育の問題のほか、女性問題に関するものも多く、子どもや女性にとつて新しい状況を作り出そうとする熱意にあふれた建設的で具体的な提案がなされた。

特に、一八九六年九月、ベルリンで開かれた国際女性会議では「同一労働同一賃金 (eguale lavoro eguale compenso)」を主張し、女性問題に関する時代に先駆ける発言を行っていることが特筆される。

近代化が遅れて始まったイタリアでは、女性解放思想の広がりも他の先進ヨーロッパ諸国より遅れていたが、十九世紀後半になると女性の工場労働者は急増し、一日に十八時間という労働時間や男性の半額という給与など劣悪な労働環境が問題視され始めていた。

そして、これを背景として、労働条件の改善を目的とした様々な組織が誕生し、女性の労働をめぐる議論も行われた。例えば、アンナ・マリア・モッツォーニにより、「女性権利擁護同盟」(一八八一年)や「女性労働者連合」(一八八二年)が設立され、女工や女性電話交換手、女性教師らの低賃金や長時間労働、あるいは女性に対する抑圧的状況の改善がめざされた。また、一八九〇年代末には、モッツォーニとアンナ・クリシヨフによる母性保護法をめぐる論争が『アヴァンティ!』誌上で繰り広げられ、クリシヨフが女性労働者の深夜労働の禁止、産休の取得と産休時の給与保障など女性の「保護」を主張したのに対して、モッツォーニが自由な競争により女性の労働を推進しようと主張した。また、一八九七年には、エミリア・マリアーニが同一労働同一賃金の原則を主張し、一九〇〇年には、エミリア・マイノ・ブロンツィアーニが女性に対する保護と男女同一賃金を主張した。

このように十九世紀末になると、イタリアでも女性の地位向上へ向けての動きが徐々に進展し、論争も深められていくのだが、その中でもモンテッソーリによる同一労働同一賃金の主張はかなり早い時期でなされているのである。

また、彼女は、一八九九年六月にロンドンで開かれた女性会議での演説をまとめた論文で、労働の場における女性差別に対して次のように述べている。

「女性労働者には正当な報酬が支払われていない。

(中略) 女性教師は子どもの教育の約三分の二を担っているが、男性教師よりも低い地位に置かれている。

昇進は女性に開かれておらず、学校教師の改善へ向けた改革は、女性教師のことを念頭に入れていないことが多い。女性は秘密を守ることができないという偏見があり、数ヶ月前わが国でおきたように、幾つかの国ではまだ、電話交換手はパンのない家族か、家族のないパンかを選ぶことを強いられる。女性医師や女性の

弁護士は、生存競争を生き抜いていくのに社会の偏見や法律自体に障害物があるとしている」

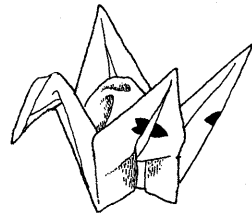
(「女性問題とロンドン

会議」。原題は《La questione femminile e il

Congresso di Londra》in *Vita dell' Infanzia*, xxxv n. 5, 1986.)。

このように職場での女性差別の現実を取り上げ、制度や法の中で組み込まれてしまつて自覚されにくい差別的構造や差別的意識の問題も指摘している。

さらに、モンテッソーリは女性が公的な場から遠ざけてきた社会の仕組みや女性が自ら物事を知り考え、行動し、経済力を持つことを妨げてきた社会規範、さらには、夫に従属して自分を無にして生きることを強いてきた家族のあり方の問題などにもふれた。そし



て、「女性が受身である時代は終わった」と述べ、「正義とヒューマニティの名のもとで」女性が政治的経済的権利を獲得できる社会の確立を訴えた。

男女同一の能力観

モンテッソーリによる同一労働同一賃金をはじめとするこれらの主張の根底には、女性も男性と同様の労働を行える能力をもつという当時としては非常に新しい考え方があった。当時、女性は身体面でも知的な面でも男性より劣った存在として見られ、教育や労働の場で差別されていたが、モンテッソーリはそのような女性観にとられない極めて新しい見方をもっていた。この能力観はどこからきたのであろうか。

前回見てきたように、モンテッソーリはセルジヤロンプローゾらの人類学者から影響を受けた。特に、「生命の援助」というモンテッソーリの基本的思想はここから生まれていると考えられる。しかし、一方

で、当時の人類学は、頭の大きさや手足の長さなどの測定値により男女の優劣を決め、科学の名のもとに男女差別を助長するような面をもっており、モンテッソーリはこの点に異論を唱えた。そして、彼女は人類学と同じ実証主義的方法を用いながらそれまでの研究とは反対の結論、すなわち、女性の優性を示そうとしている。

例えば、体重に関して女性は男性の八十五パーセントなのに、脳の重さに関しては九十パーセントであり、体重に比して脳の重量の割合が高く、女性の知能の方が優れている可能性を示唆した『教育学的人類学』。

ここでは、この結論の当否よりも、モンテッソーリが当時の実証主義的方法を用いて主流派の見方とは異なる結論を導き出し、女性の劣等性を主張する人類学の見方を見直そうとした点が重要である。

モンテッソーリは、ロンドン会議で出会った各国の

女性たちが「知性と熱意に輝く目をもっており」、「社会的進歩のために働き」、「普遍的な福祉に貢献する女性」であったことを記録しているが、社会で活躍するこれらの女性たちとの出会いも彼女の女性観に影響を与えていたと考えられる。また、女性解放思想の広がりや傍観者としてではなく、働く女性として、自身自身に深く関わるものとして受けとめ、内面化していたし、自分自身が女性の教育と就業の面で新たな局面を切り開く役割を果たしてきたことが大きな自信となっていた。さらに、モンテッソーリが一つの学問だけではなく、多様な学問思想の動きと成果に敏感であり、多様な視点を偏らずに総合的に採りいれることができたことも当時の女性観から自由になれた理由であったと言える。

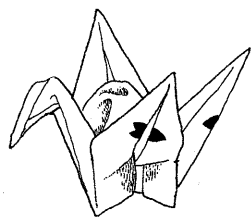
このような女性観をもっていたモンテッソーリは、女性の多くが就学の機会を得られず、読み書きできず無知であるが故に、産む道具となっている事情を深く

憂え、その問題点を指摘した。そして、教育こそがこのような状況から女性を解放するものと考えていた。

生活能力の重視

モンテッソーリは教育問題に視点を移すにつれ、女性の労働条件の問題について徐々に触れる機会を減らし、女性を別の形で援助する方向に進んだ。すなわち、教育を通して女性を援助するという方向である。

当時は、教育を受ける機会についても教育内容についても男女で差がつけられていたために、教育を通して性差が広がる傾向にあった。しかし、モンテッソーリは男女の性にとらわれず、個々人のもつ知的技術的能力の発展が課題であることを認識していた。男女の能力格差の思想から自由であったモンテッソーリは、



男女の枠にとらわれずに教育思想を構築しようとした。モンテッソーリが男女の差異にとられない能力観をもったことは、教育に携わる中で男女を問わず子どもの集中力や知的好奇心を発見することにつながった。そしてその発見をもとに男女を問わない知性の獲得を援助する教育へと発展したのである。

人間の能力に関するこの新しい思想は、「子どもの家」(一九〇七年)での教育において、また別の形で具体的に現れている。モンテッソーリは子どもが自立して生活できるように日常生活の訓練を取り入れ、生活に関わる技術を男女問わず、身に付けることを求めたのである。

モンテッソーリは「女性も男性と同じくらい自由に社会の中で働くべきだ」と主張したが、社会で賃金を得ることだけではなく、食事の用意や病人の看病といったいわゆる家事の重要性も評価した。そして、男性も女性も家事能力を身につけ自立した生活ができる

ことが大切であると考えた。

「一人の賢明で熟達した職人を思い出してみよう。彼はたくさんの完全な仕事を産み出すことができるだけではなく、職場の全般的な活動を統制し指導する能力があるので、仕事場でアドヴァイスすることができ。彼は他人の怒りに際しても微笑して仲裁者となることができる。しかしながら、われわれは、この有能な職人が自分の家庭で、スープが好みに合わないとか、定刻に用意していないと言って妻をしかつたのを知って少しも驚いてはいけない。家庭においては、彼らはもはや有能な職人ではない。ここでは熟達した職人はその妻である。彼女は夫に奉仕し、彼のために食物を調理する。彼は、有能である場面では温和であるが、奉仕される場面では横暴である。もしも彼がスープを料理する方法を学ばなければ、おそらく完全な人となることができるであろう！ 人生における楽しみと発展のために必要なあらゆる行為を遂行することができる

きる人は自己に打ち勝ち、そうすることでその能力を倍化し、個人として自己を完成する。われわれは未来の世代を有能な人 (uomini potenti)、すなわち、自立した自由な人にならなければならない」〔『科学的教育学の方法』〕。

このようにモンテッソーリは男性が仕事をするだけでなく、生活能力を身に付けることで自立した自由な人になりうることを示唆している。このような家事の位置付けは、女性解放思想が発展し家事労働の位置付けの変化した現代にはなされているが、当時の教育学の中ではまず見られないものであった。職人としての能力を生活における家事能力と同等に位置付けたこと、そして、このような能力の形成を男性や男子にも求めたことは画期的な出来事であったと言える。それは、デュローイの生活教育とは異なる角度から提起された生活教育の内容であった。家事能力の形成によって、人間が真に有能となり、自立することができ、自

由になれるという思想の源泉として女性解放思想の影響を見るのである。

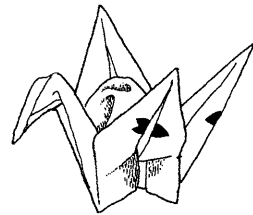
そして、生活技術を男女問わず養成するという

新しい要素がモンテッソーリ教育の具体的な方

法となって開花し、実際生活の練習は感覚教育や知的教育と並んで、モンテッソーリ教育法の一つの特色となっていた。日常生活における基本的能力とは、生活の中で生きて働く実際的かつ能動的な技術であり、生活の中で多様な形で生きて展開され、自立的生活を導く生活知であり、男女の生活自立が問われる今日、その意義はますます大きくなっていると考えられる。

家庭の社会化による女性支援

女性解放思想の影響は、「子どもの家」そのものの



社会的地位付けにも見られる。すなわち、モンテッソーリは「子どもの家」を「社会化された家庭」と称して、子育てを共同化する場と位置付けた。すなわち、労働する母親たちを直接労働条件の面からではなく、子育ての面からバックアップしようとした。

当時の女性労働者の多くが乳母に、一部が託児所子どもを預けていたが、捨て子もまだ多かった。その中でモンテッソーリは「子どもの家」を通して子育てと労働の両立を図ろうとした。それは工場労働者の女性だけではなく教師など中産階層の女性にとっても、子どもの健やかな発達を保証しながら仕事の継続を可能にする機能をもっており、さまざまな階層の働く女性の要望を反映したものであった。「子どもの家」には子どもの発達に適した教育の場という意義だけではなく、女性が安心して労働に携わることができるための支援という女性の自立的側面からの意義があったのである。

モンテッソーリは働く親を支援していく必要性を理解していただけでなく、子育てにおける親の役割の重要性も認識していた。そこで彼女は親が子どもを清潔にして「子どもの家」に送り出すことや「子どもの家」の教育に関して教師に協力すべきことなどを明文化して親に自覚をもたせ、教師と親の協力関係の下で子育てを共同化することをめざした。

モンテッソーリは、女性解放思想から影響を受けて、男女平等の能力観を形成し、男女を問わずすべての子どもを対象にした知性の形成の援助という思想を確立するとともに、男女ともに生活技術を獲得することを重視した。さらに、「社会化された家庭」観を築き、働く女性を支援した。